平成15年2月1日発行　明治31年4月20日　第3種郵便物認可　(毎月1回1日発行)　第148巻　第11号　ISSN 0287-2706

2003
2
総号1848号

英語青年

増大号

THE RISING GENERATION

●特集

認知言語学のフロンティア

山梨正明・熊代敏行・熊代文子・中村芳久・鍋島弘治朗
堀江 薫・児玉一宏

●連載ほか

「成り上がり者のカラス」はシェイクスピアにあらず(下)　河合祥一郎
イギリスの短篇小説を読む　若島 正
〈訳注式〉英語詩演習　鈴木雅之
リレー連載：英語二重目的語構文の全体的検証　高見健一

角杯に泉水をみたすダーモット(スティーヴン・リードによる挿絵)

KENKYUSHA

認知意味論
——バークレー、ヨーロッパのメタファー研究を中心に——

鍋島弘治朗

1. はじめに

認知言語学の方向を決定づけた古典的名著である Lakoff と Johnson の *Metaphors We Live By* (以下、MWL) から、言語学における新しいメタファーの研究が始まったと言える。MWL の出版以来 20 余年たった現在、MWL の精神を継承する注目すべき研究書が 2 冊出ている。一方は、Lakoff と Johnson 自らの手による Lakoff and Johnson (1999) であり、他方は Kövecses (2002) である。前者はこの研究プログラムの成果と哲学的基盤を明示したもの、後者は MWL の精神をテキスト化したものである。この 20 数年間で、認知言語学のメタファー研究は質・量ともに充実し、研究手法もさまざまに開発されてきている。

2. Lakoff and Johnson (1980) の基本的枠組み

MWL は、メタファーを表層レベルの言語的現象でなく、思考と概念を特徴づける認知的な現象と位置づけ、従来の客観主義的な言語観を前提とする言語学研究を根底から批判し、新しい認知言語学のパラダイムの出現を可能にした注目すべき研究である。

同書は、人間の思考体系がいかに比喩によって特徴づけられているかを、豊富な言語データで実証している。例えば、(1) に挙げるような言語表現を見ると、理論に関して建物の用語が繰り返し用いられていることがわかる。

(1) a. Is that the *foundation* for your theory?
b. The argument is *shaky*.
c. The argument will *fall apart*.
d. The *framework* of the theory

すなわち、*foundation* (基礎), *shaky* (揺れる), *fall apart* (崩れる), *framework* (枠組み) などの用語は、「建物」から「理論」へ多義を示している。また、(2) のような知識(推論)も援用されている。

(2) a. 土台が不十分では高い建物は建てられない
b. 上層が壊れても土台が崩れるとは限らない
c. 激しい揺れは建物が崩れる危険性を示す

以下に、MWL の基本的枠組みを整理する。

- 定義: メタファーとは領域間の写像である。
- 表記: THEORIES ARE BUILDINGS / Theories Are Buildings (〈理論は建物である〉)
- 写像: 語彙や推論などに、要素、関係、構造の対応関係があること
- 領域: この例における「理論」および「建物」
- Source Domain (起点領域): この例における「建物」
- Target Domain (目標領域): この例における「理論」

領域とは何か、MWL では詳しく説明されていないが、認知領域という形で Langacker (Langacker 1987), フレームという名称の下に Fillmore, ICM (理想化認知モデル) の名で Lakoff (Lakoff 1987) が、ゲシュタルト的な知識構造の明確化を図っている。Clausner and Croft (1999) は「領域とは認知領域、フレーム、ICM を含む概念として統合的に扱うべき」という立場を取る。

さらに、メタファーの動機づけは重要である。本の数が多ければ高く積みあがる (More Is Up)、視覚情報から物事を理解する (Knowing Is Seeing) など、両領域を同時に経験する共起的経験をメタファーの動機づけとしている。

MWL の起点領域、目標領域、動機づけは、それぞれ、旧来のメタファー研究における、媒体 (Vehicle)、主意 (Tenor)、根拠 (Ground) に呼応する。MWL は、対応関係を表現レベルでなく領域レベルとした点、および根拠を共起的経験基盤に限定した点が独創的であると言える。

3. 1990 年以降の認知メタファー理論の変遷

MWL によるプログラムは、その後 Lakoff (1987) での「怒り」の研究事例、Lakoff and Turner (1989) の詩的メタファーに関する研究を経て、不変性原理、プライマリー・メタファー理論、ブレンディング理論、メタフォトニミー研究へと続いていく。

●イメージ・スキーマの導入——不変性原理

Lakoff は、Lakoff (1990) の不変性仮説 (3a) で、イメージ・スキーマ (以下、IS) をメタファー理論に導入し、Lakoff (1993) でこれを修正、(3b) を加えて、不変性原理 (3a, b) にまとめ上げた。

(3) a. Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain.
b. in a way consistent with the inherent structure of the target domain.

IS とは、Lakoff (1987) における *Over* の研究を起点として現在注目されるトポロジー的構造である。容器の IS, Source-Path-Goal (経路・線) の IS, リンクの IS, 部分全体の IS, バランスの IS などが Johnson (1987) に挙げられている。IS に関しては、Gibbs and Colston (1995) に興味深い分析と心理学からの研究紹介がある。また、Clausner and Croft (1999) も IS について考察を加えている。

(3b) は、Target domain overrides (比喩の写像に課される目標領域からの制約) と呼ばれる。例えば、〈人生は旅〉とすると、旅における分岐点は人生における選択に対応する。旅では、一方の道を選んでも、逆戻りして他方の道を選び直せる。しかし、人生では、髪を切る、自殺する、など不可逆的な選択も多い。なお、目標領域に固有の構造性を認めることは、後にブレンディング理論で Turner が両領域の構造的類似性スキーマを検知する Generic レベルを導入することに通ずる。

●〈人生は旅〉の解体

Lakoff (1993) は、イベント構造に関するメタファー (Event Structure Metaphor) を体系的に記述した点でも重要である。例えば、"I'm at a crossroads." (交差点にいる＝人生の方向を決める選択を迫られている) などの表現を含むメタファーは、従来、〈人生は旅〉と呼ばれていたが、その背景には、(4) のような複雑な写像を持つ、出来事一般に関するメタファー体系が存在した。

(4)・状態は場所　・変化は移動　・原因は力　・行動は自律的移動　・目的は終着点　・手段は経路　・困難は移動の妨げ　他

ここで新たな問題が発生する。例えば、〈原因は力〉や〈困難は重荷〉(移動の妨げの一例) は人生に関係なく独立したメタファーとして機能できる。すなわち、(4) には複数のメタファーが共存していることが判明する。これが、次に述べるプライマリー・メタファーの考えに発展していく。

●〈理論は建物である〉の解体——プライマリー・メタファー理論の形成 (Grady 1997, 1999, Lakoff and Johnson 1999)

Grady (1997) は、MWL から〈理論は建物である〉のメタファーを取り上げ、①写像の不完全性、②経験的動機づけの欠如、③他のメタファーとの重複の 3 点にわたって問題を提起している。

第 1 に、(5) に見るように、建物に関するすべての属性が目標領域で利用されるわけではない。すなわち、写像が部分的である。

(5) a. ?This theory has French windows.
b. ?The tenants of her theory are behind in their rent.

第 2 に、〈理論は建物である〉のメタファーには MWL で重要視される経験的動機づけが欠如している。理論と建物の共起的体験といえば、建物の中で理論を考える経験などが挙げられるが、このような経験は恣意的で頻度も低く、不十分である。

第 3 に、「理論」だけでなく、(6) に示すように「政府」、「結婚」などさまざまな抽象的構築物が、建造物として語られ得る。

(6) a. the architect of Nazi Germany
b. Trust is the foundation of marriage.

そこで、これら 3 点の問題を解決するために、〈理論は建物である〉のメタファーを (7) の 2 つのメタファーに分解し、これらにプライマリー・メタファー (Primary Metaphor, 一次メタファー: PM) という新しいステータスを与えた。

(7) a. Organization Is Physical Structure
b. Viability Is Erectness

(7a) と (7b) の PM は合成されて、Viable Organization is Erect Physical Structure というメタファーを形成する。「存続する組織体」の一例が「理論」であり、「直立した物理的構造物」の一例が「建物」であるという形で〈理論は建物である〉のメタファーが成立する。

PM 理論では経験的基盤の明確なもののみを PM として認めるという立場を取る。PM の例として、Difficulty Is Heaviness, Desire Is Hun-

ger, Affection Is Warmth, Similarity Is Proximity 等が挙げられている。

PM 理論の功績は 3 点挙げられる。まず、理論内の整合性の見地から、経験的動機の欠如、写像の不完全性(ギャップの存在)、他のメタファーとの重複という問題点を摘出した点である。第 2 に、実際のデータに合致したメタファーの合成と具現化という手法を導入したことで、メタファー研究の手法を拡大させたこと。第 3 に、PM という身体的基盤に基づいた新しいメタファーのカテゴリーを提唱することにより、感覚・運動を起点領域とした新たなメタファー研究が可能となった点である。

一方、問題点も多い。データの生産性が従来のメタファーに比べて極端に低い点、*Organization, Viability* などの抽象的な呼称のため、データとメタファーの関係が不透明になる点、Risk-Taking Is Gambling など、動機づけの異なる種類のメタファーが混在する点(後述)などが問題となる。なにより、すべてのメタファーを創出する均質なメタファー群が存在するという考え方は、還元主義的であり、認知言語学のパラダイムとそぐわない可能性が高い。

●〈人生は賭け〉の解体

実は、MWL はメタファーの基盤として共起性に加えて類似性を認めている (p. 155)。しかし、その後、類似性に関する言及は影を潜め、共起的基盤を全面的に推し進めたのが Grady (1997) の PM 理論であった。近年、動機づけの種類でメタファーを分類しようとする試みが再び見られ (Kövecses 2002, Grady 1999)、これは共起性基盤絶対論に対する反省と考えられる。Kövecses (2002) は〈人生は賭け〉を構造的類似性メタファーとして取り扱う。Grady (1999) もすでに、このメタファーを Risk-Taking is Gambling と呼び、〈Generic is Specific〉のメタファー類を立てている。なお、個別事例から一般的なスキーマを抽出し、他の無数の個別事例に当てはめるのが Lakoff and Turner (1989) で提唱された〈Generic is Specific〉のスキーマである。Grady (1999) はさらに、メタファーはカテゴリー包含であるとした Glucksberg and Keysar (1993) の例、"My job is a jail" もこの類に含めている。

●ブレンディング理論 (Fauconnier and Turner 2002)

ブレンディング (Blending) 理論は、メタファー理論の 2 領域に対応する 2 つの Input スペースに加え、両スペースの上位カテゴリーとなる Generic スペースおよび、両スペースの混合の場として Blended スペースを置く。ここで問題になるのはメタファー理論とブレンディング理論の関係であるが、メタファーが概念構造(知識 / 長期記憶)、ブレンディングがオンライン処理と考えると両理論の役割分担は意外に明確である。主要な相違点は、①起点領域と目標領域の構造を抽象した上位範疇 (Generic) スペースの設定、②両領域に存在しなかった構造 (Emergent Structure) が創出されるという主張である。①の相違点は、メタファーの動機づけがいわゆる共起性基盤だけでなく(構造的)類似性に基づくという主張につながる。

●メタフォトニミー研究

Goossens (1990) がメタファーとメトニミー(換喩)の緊密な連携をメタフォトニミー (Metaphotonymy) と呼んで以来、メトニミーおよびそのメタファーとの関連に関する興味が高まっている。メトニミーとは、部分と全体など隣接性に基づく概念機構である(例: ホワイトハウス(=アメリカ政府)の声明)。近年の出版には、Panther and Radden (1999), Barcelona (2000) などがある。取り扱う範囲は、メトニミーの分類、意味拡張、文法現象との関連とさまざまだが、メタファーとの関連から興味深いのは次の 3 点である。

まず、第 1 にメタファーの動機づけがメトニミーであるという主張。Grady もメタファーの共起性基盤がメトニミーと呼び変えられる可能性に言及している。

第 2 に、メトニミーとシネクドキー(提喩)の区別に関して。シネクドキーとは、種と類などカテゴリー関係に基づく概念機構である(例: 花(=サクラ)見に行く)。MWL 以降、シネクドキーはメトニミーの下位区分に含め、メタファーとメトニミーが二項対立を成すとされているが、日本では三項対立の図式による研究が主流である。領域とは何かという問題も踏まえて、二項対立か、三項対立か、今後、理論内の整合性および言語データに対する説明力の面から検討していく必要がある。

第 3 は、Glucksberg and Keysar (1993) の "My

job is a jail." といった例の取り扱い。「監獄」が監獄の持つ「自由を奪われた嫌な」感情の意味で使われているとすれば、メトニミーと言える。さらに、「監獄」が「嫌なもの」の類の代表例となり、この類が「私の仕事」を含むとすれば、シネクドキーも関与することになる。ベルギーの言語学者集団グループμがメタファーを「二重の提喩」(種→類および類→種)と分析したこととも合わせて今後の理論的な検討が更に期待される。

4. 多様化する研究手法

Lakoff and Johnson (1999) は、メタファーの多様な研究方法として、多義性、推論、詩的言語、歴史的派生の他、心理実験的証拠 (Gibbs の一連の研究)、発達心理的証拠 (C. Johnson の一連の研究)、手話による証拠 (Taub の研究) などを挙げている。さらに、メタファーの普遍性と文化相対性を考えれば、Cienki (1998) の類型論的アプローチも注目される。

また、バークレーでは、Lakoff がコンピュータ科学の Feldman と共同で言語とコネクショニズムの学際的研究 (Neural Theory of Language: NTL) を行っている。その主な成果として、特に *Over* などの空間認知をコネクショニズムで実装した Regier, アスペクトと比喩を取り扱った Narayanan, 手の動きのシミュレータを利用した Bailey の研究などが注目される (NTL に関しては http://www.icsi.berkeley.edu/NTL/ を参照)。また、NTL には Fillmore を中心としたプロジェクト (FrameNet) との共同研究も注目される (FrameNet に関しては http://www.icsi.berkeley.edu/~framenet/ を参照)。

5. 結びにかえて

PM の研究によって、認知メタファー理論は新しい段階を迎えたと言える。この理論はメタファーの動機づけが共起性基盤であるという考え方を追求した。その結果、共起性基盤のないメタファーについては、これを分解し、より身体的なメタファーの合成から導き出すという手法を開発した。

一方で、メタファーの動機づけが共起性基盤しか存在しないという考え方は、すでに Grady (1999) で修正が始まっている。〈Generic is Specific〉のメタファー類はカテゴリー関係が動機づけだとも考えられるし、Generic スペースを持つブレンディング理論は(構造的)類似性を動機づけとして見直している。

合成という考え方は、メタファーの実態に適合している。しかし、特定のメタファーを均質であると考え、特別の地位を与える PM の考え方は還元主義に陥る。むしろ、さまざまなメタファーが多様に合成されるようなシステムを想定した方がよいのではないか。構文文法の類推を利用すれば、文を構成する語もそのテンプレートの構文も同様に意味を担う。そこで、PM (一次メタファー) も、その合成である二次メタファーも、同様にメタファーとしてのステータスを保っている、という考え方も可能である。〈理論は建物である〉を例にとると、「建物」の概念的顕現性がこのメタファーに力を与えていることは、用例の豊富さからも窺えるからである。

メタファーとメトニミーおよびシネクドキーの関係も重要である。今後、メトニミー、カテゴリー関係、イメージ・スキーマ、共感覚などとの相互的な関連を踏まえた体系的な整理が必要になると思われるが、その中で強調しておきたいのは普遍性と文化的相対性である。メタファーを認知機構と見なすことは、メタファーの普遍性の主張につながる。一方、文化的に固有の概念体系や価値体系が、メタファーの種類や選択に影響を与えることは想像に難くない。この意味で、認知類型論的視点からの研究も不可欠である。

今後、認知言語学におけるメタファー研究は、知のメカニズムの解明を図る中心的な研究としてさらに進展し、認知科学の新たな研究の場を提供していくものと考えられる。

主要参考文献

Barcelona, A. 2000. *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*. Mouton de Gruyter.

Cienki, A. 1998. "STRAIGHT." *Cognitive Linguistics* 9-2: 107-49.

Clausner, T. and W. Croft. 1999. "Domains and Image Schemas." *Cognitive Linguistics* 10-1: 1-31.

Fauconnier, G. and M. Turner. 2002. *The Way We Think*. Basic Books.

Gibbs, R. W. Jr. and H. L. Colston. 1995. "The Cognitive Psychological Reality of Image Schemas and Their Transformations." *Cognitive Linguistics* 6-4: 347-78.

Glucksberg, S. and B. Keysar. 1993. "How Metaphors Work." In A. Ortony ed. *Metaphor and*

(63 ページ下欄へつづく)

英語英文学教育において「キャノン」重視、「緻密な読解」が総て「受信型授業」になるというのではない。しかし、そうなりがちであることは確かだ。「キャノン」重視、「緻密な読解」の立場を取るのであれば、学生を受け身の学習にさせない工夫がいっそう求められる。

このことに関連して述べておきたいのは、今回のアンケート回答文で学生たちの「不読書」(読書せず) を歎く声は多かったにもかかわらずその対処法を述べた答えが少なかった。スペインの読書運動から始まった「読書のアニマシオン」というものが近年わが国でも盛んになりつつある。簡単に言えば、ゲームを楽しみながら本の世界に導入するという手法である。映像や映画を取り上げることについても今回、否定する人がいるのでびっくりした。そのような人からすれば「児戯」に過ぎると貶されるかもしれないが、今の学生の実態に迫る上でぜひ、「読書のアニマシオン」を勧めたい。

以上、二回にわたる英文学教育特集の感想を述べさせていただいた。誤読や独断もあるかと思われるが何らかの参考となるならば幸いである。 (竹長 吉正)

「自由の女神」が左手に持っているものは何?

大作映画『タイタニック』の最終シーンの中、ローズが進み行くカルパチア号の手すりから見上げるリバティー島に立つ「自由の女神」像 . . . 。

授業の一部として、政治・経済・社会・歴史などの常識的な情報が、大学生として必要である、との思いから『5 分間英語スーパー・クイズ』を用いて勉強しているが、その中の正誤を問う設問の一つに

(3) The Statue of Liberty holds a torch in her right hand and the Bible in her left hand. (p. 8)

というのがある。

今この拙文をお読みの読者各位、誠に僭越ですが(筆者は間違っていたのです)、この設問に正しく答えられるでしょうか。なお、この教科書の「教授用資料」の答えは○になっております。

さて、11 月某日、某テレビ局の番組『クイズ$ミリオネア』で「自由の女神」が左手に持っているものは何? という問いに、回答者は「独立宣言書」と答え、見事に 150 万円を獲得したという。

ここで質問。「独立宣言書」というものは実在するのであろうかと。

ご存じのように、1776 年 7 月 4 日の米国の独立宣言に当たっては「独立宣言文」が数百枚印刷されたのであって「独立宣言書」というものはないのである。

では、『5 分間英語スーパー・クイズ』にあったように「聖書」であろうか。ここで研究社刊『新英和大辞典』を次々に引いてみる。

【第 4 版】: 右手に高くたいまつをかざしている [筆者: 左手には言及なし]

【第 5 版】: 右手に高くたいまつ (torch) をかざし, 左手に「世界を照らす自由」(Liberty Enlightening the World) の文字を刻んだ板を持っている

【第 6 版】: 右手に高くたいまつ (torch) をかざし, 左手に独立宣言書を持っている

第 5 版と第 6 版では「板」と「独立宣言書」の違いがある。果たしていずれが正しいのであろうか?

第 5 版の記述にある「世界を照らす自由」(Liberty Enlightening the World) は、「自由の女神」の正式の名称であり、アメリカ合衆国の独立記念日である 1776 年 7 月 4 日という日付がローマ数字 (JULY IV MDCCLXXVI) で刻まれている tablet「銘板」なのである。

したがって、「自由の女神」が左手に持っているものは聖書でもなく、独立宣言書でもないのである。

これからは、自信を持って「自由の女神」の右手には「たいまつ(松明)」をかかげ、左手には「1776 年 7 月 4 日という日付をローマ数字で刻んだ tablet「銘板」」を持っている、と教えられる。

参考書: *Liberty: The Statue and the American Dream*, National Geographic's Photographic Services, 1985.

「知るは喜び、調べるは楽しみ、学ぶは一生」

(土屋 唯之)

(19 ページよりつづく)

Thought. 401–24. Cambridge University Press.

Goossens, L. 1990. "Metaphotonymy." *Cognitive Linguistics* 1–3: 323–40.

Grady, J. 1997. "THEORIES ARE BUILDINGS Revisited." *Cognitive Linguistics* 8 (4): 267–90.

Grady, J. 1999. "A Typology of Motivation for Conceptual Metaphor." In R. Gibbs and G. Steen, eds. *Metaphor in Cognitive Linguistics*. 79–100. John Benjamins.

Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind*. University of Chicago Press.

Kövecses, Z. 2002. *Metaphor*. Oxford University Press.

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press.

Lakoff, G. 1990. "The Invariance Hypothesis." *Cognitive Linguistics* 1: 39–74.

Lakoff, G. 1993. "The Contemporary Theory of Metaphor." In A. Ortony ed. *Metaphor and Thought*. 202–51. Cambridge University Press.

Lakoff, G. 1996. *Moral Politics*. University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.

Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason*. University of Chicago Press.

Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1. Stanford University Press.

Panther, K.-U. and G. Radden. (eds.) 1999. *Metonymy in Language and Thought*. John Benjamins.

(関西大学専任講師)